

(4) 江戸時代

慶長2年(1597)能化丸は元服して貞隆と名を改め、後見人に代わって親政を開始するが、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて、徳川家康に協力しなかったことを理由に所領12万石を召し上げられ、岩城家数百年にわたる当地支配は幕を閉じた。以後、徳川家による幕藩体制の下、いわき地方の支配体制は変転の時代に入る。

いわき地方における主な出来事と所領支配の変遷

年号 (西暦)	主要な出来事	いわき地方の主な支配体制の推移
慶長5年 (1600)	関が原の戦い。岩城氏(岩城貞隆)、佐竹氏(佐竹義宣:常陸国)らは徳川方に組せず	岩城貞隆、除封され江戸に謹慎。(1601) 貞隆、岩城領12万石没収。
慶長8年 (1603)	鳥居忠正、赤目崎物見ヶ岡に磐城平城築城開始(～1615)	磐城平藩 ・鳥居忠政 下総国矢作(岩ヶ崎)から磐城平へ10万石で入封(1602)
元和8年 (1622)	高久百姓騒動。48人の犠牲者	・内藤政長 上総国(千葉)から7万石で入封。楢葉郡、磐城郡、磐崎郡、菊田郡を支配(1622)
寛文9年 (1669)	葛山為篤『磐城風土記』を編纂	・窪田藩 ・内藤正長 女婿、土方雄重立藩、2万石(1622) ・内政素乱のため、所領没収(1684)
元文3年 (1738)	磐城平藩領内で百姓一揆がおこる(元文一揆)	・内藤政晴 立藩2万石(1634) ・板倉重同 安中より入封1万5千石(1702) ・本多忠如 入封、1万5千石(1746)
安政2年 (1855)	片寄平蔵 白水川上流、弥勒沢で石炭を発見	泉藩 ・内藤政晴 立藩2万石(1634) ・板倉重同 安中より入封1万5千石(1702) ・本多忠如 入封、1万5千石(1746)
万延元年 (1860)	安藤信正老中になる。桜田門外の変(井伊直弼殺される)	湯長谷藩 ・内藤忠興 ³ 男、遠山政亮 立藩、1万石(1670)
文久2年 (1862)	安藤信正 坂下門外に襲われ負傷。信正は、戊辰の役に際し、奥羽諸藩と連合し、西軍と戦うが敗れ、泉藩主本多忠紀、湯長谷藩主内藤政養とともに謹慎	棚倉藩 ・丹羽長重 立藩5万石(1622) ・内藤信照 入封(1627) ・太田資晴 入封(1705) ・松平武元 入封(1728) ・小笠原長恭 入封(1748) ・井上正甫 入封(1817) ・松平康爵 入封(1836) ・安部正静 入封(1866)

磐城平城の絵図

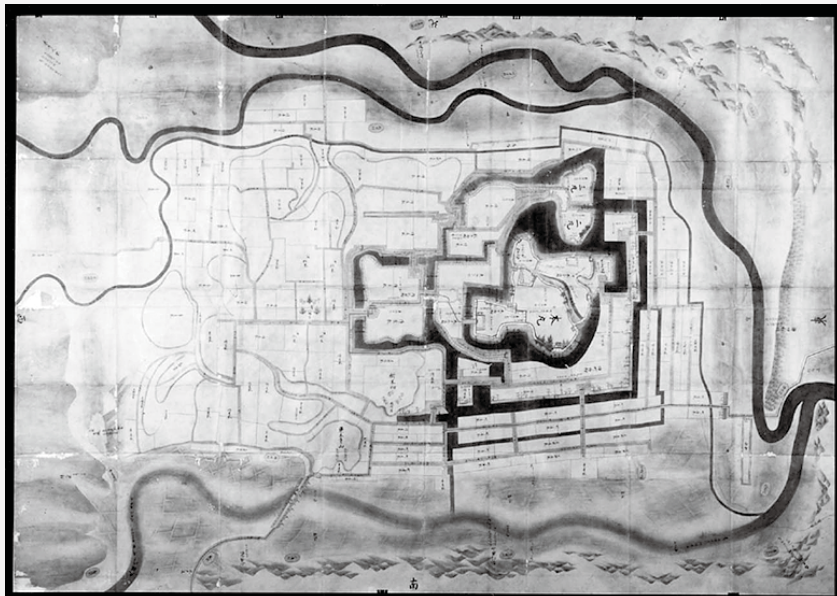
江戸時代に描かれた磐城平城や城下町の絵図は、意外にたくさんある。

その代表格ともいえるのが「正保平城下絵図」。寛永14年(1637)、九州で島原の乱がおこり、その鎮圧にてこずった幕府は、全国各地の地理や城の構えなどを詳しく把握することの必要性を思い知らされた。三代将軍、徳川家光は全国統一規格による絵図の作成に乗り出した。この時に作成された絵図が「正保国絵図」「正保城絵図」などといわれるものである。

この「正保国絵図」は100間を4寸、つまり約1500分の1の縮尺で描くこととされ、城については本丸、二ノ丸、三ノ丸の大きさ、堀の深さや広さ、山城か平城かの別を書き入れることが規定され、城下については侍町や町屋の広さ、川や山、坂の名前を記入することとされていた。さらに、興味深い点としては、本道は太く、脇道は細く書くこととされ、そのうち本道には冬に牛馬が通行できるかどうかを注記することとされた。また、川については、川幅を記入することや、船渡りか、歩渡りかを書き入れることが求められた。

ところで、磐城平藩の「正保平城下絵図」は、このような正保度様式といわれるルールに従って描かれていることや、さらに、①磐城平藩内藤家によって新川の開鑿(慶安5年(1652)9月に開鑿の通達)が行われたが、それが絵図に描かれていない、②道匠小路に寺屋敷(城西寺)の記載があるが、この寺は延宝6年(1678)に別な場所に移転しているので、絵図はそれ以前のものである、などの事から、正保年間(1644~1647年)に幕府からの求めに応じて作成されたものと考えられる。

また、この「正保平城下絵図」以外にも「磐城平古地図」(元禄年間1696年頃)、「岩城平ノ絵図」(元禄年間1696年頃)、「平城下古地図」(享保から元文年間1735年頃)、「磐城平ノ絵図」(寛政年間1789年頃)などが磐城平城の主な絵図として知られている。



正保平城下絵図
市指定文化財